

”上質なときを暮らす“SJRだより

眺めの いい部屋

2019 春夏

No.04

大分県由布市「由布岳」

「天声人語」こぼれ話(4) ベルサイユ宮殿のトイレ

栗田 亘

ベルサイユ宮殿は、パリからバスで一時間行つたところにあります。太陽王と呼ばれたルイ十四世が命じて建てられました。最近では、日産自動車前会長のゴーン氏が若い花嫁と二度目の結婚式を挙げた場所として脚光を浴びました▼ある日の「天声人語」でベルサイユに触れたボクは、余談として、宮殿にはトイレが一つもなかったと書きました。王族貴族男女を問わず、広大な庭園に出て木の陰で用を足したと伝えられます。フランスの歴史学者コルバンは「宮殿にはトイレがないので、宮殿中悪臭を放っていた」と確言しています。太宰治も名作『斜陽』で、そう記しました▼「それは間違いだ。以前、朝日の記者がベルサイユにはトイレがあつたという記事を載せていた」と読

者から抗議がきました。え？ 信じられない思いで、ぼくは古い新聞を繰りました。あつた！ 筆者は社会部の先輩、岡並木さん。岡さんは実際に現地取材していました。それによると、ルイ十四世の時には王様専用のくみ取り式トイレが一つと、おまるが約二千個あつた。次のルイ十五世の時代には水洗トイレを五十箇所設けたのだそうです。では、なぜトイレなし悪臭ふんぶん宮殿という誤伝が世界的に広まったのか▼フランス革命で宮殿は破壊され、トイレもほとんど壊されてしまった。現に、今の見学コースの途中でも、トイレにはなかなか行き当たらない。その辺りから、「宮殿にはトイレがなかった説」が流布されたのでしょうか。岡さんは「本当にトイレはなかった

くりたわたる●1940年(昭和15年)東京都生まれ。コラムニスト。「朝日川柳」選者(選者名:西木空人)、日本エッセイストクラブ常務理事、日本ナショナルトラスト理事。1965年から2002年まで朝日新聞で働く。勤務地は岐阜支局、北海道報道部、東京社会部、横浜支局など。のち論説委員となり、2001年までの6年近く「天声人語」を担当(2000本近いコラムを書く。著書に『漢文を学ぶ(一)』『(二)』『ボケッ川柳』(共に童話屋)、『明日は、どうしてくるのか?』(15歳の寺子屋)シリーズ(講談社)、『リーダーの礼節』(小学館)、『大人のための漢文51』(河出書房新社)ほか多数。



元気と笑顔を
育む菜園で、
土と触れ合い、
仲間と語り合う。

その日、庭園の一角に広がる菜園には、春に収穫するえんどう豆の苗を植え付けていく11名と後藤支配人の元気な姿があつた。その手際は実に小気味よく、昼下がりの陽光が降り注ぐ中、それぞれが真剣な表情で段取りに従って作業を進めていく。

『SJR大分ガーデニングサークル』の活動は不定期だが、菜園に誰かが姿を見せると、自然と仲間が集まってくる。どの時期に、どのような作物を植えられるのか、手がからない作物は何か、といったことなど、菜園づくりの知識が豊富な清水モモエさんや、そんな清水さんを「センパイ」と呼ぶ岩本ひとみさんは、設立当初からのメンバーだ。「今日も集合予定は午後からだつたけれど、昼食前あたりから何だかソワソワしてしまつて」と朗らかに笑う。

(後列左から) 高橋 逸代さん / 藤田 輝範さん / 清水 モモエさん / 古谷 啓子さん / 後藤 支配人 / 久保田 和枝さん / 野尻 優子さん /
(前列左から) 平野 喜子さん / 佐藤 希典さん / 武田 真砂さん / 岩本 ひとみさん / 西 房子さん

気持ちのいい場所

SJR大分『花の店うめづ』

04

散策やショッピングの合間に、
季節を感じ、おしゃべりにも花が咲く。
心と空間に潤いをくれる店。



【ショップ店員との交流も楽しい身近なショッピングスポット】

生活利便施設から文化施設までが周辺には充実し、利便性に富んだロケーションを誇る『SJR大分』。ご入居者も毎日、買い物や散策といったお出かけを思い思いに楽しむことができる。

近隣の『マルミヤストア』内にある『花の店うめづ』も、皆さんにおなじみのフラワーショップ。部屋に飾る切り花や鉢植えはもちろん、ちょっとしたギフトを求めて立ち寄る方も少なくない。その一人、ご入居者の佐野 修さんは「週に2〜3回、外出のついでに“今の時期はどんな花が見頃かな”と思ったら、のぞいて見るお店。スタッフの皆さんが気さくで、気持ちがいいですね」と話す。一方、店長の梅津さんも「SJR大分のお客さまは、普段から植物と親しむ暮らしをなさっている印象。スタッフにも気軽に優しい言葉をかけてくださるなど、気持ちにゆとりのある毎日を送られていて素敵」と、いつも思っているのだとか。季節のお花とコミュニケーションで心と空間を潤してくれる、ご入居者にとってのそんな“気持ちのいい場所”として、これからも親しまれていくに違いない。

入居して実感。
「ここに決めて良かった」

ガーデニングという共通の趣味を通して仲良くなった皆さんだが、入居の時期やその理由はさまざま。遠方で暮らす子どもと一緒に見学に訪れ、「入居者が穏やかに暮らす様子を見て共感を覚えた」と話すのは古谷啓子さん。『SJR千早』に資料請求したことがきっかけで『SJR大分』の計画を知り、「建物が出る前から、もう入居を決めていました」という平野喜子さんは、実際に入居してみて「自分の選択に間違いなかった」と実感している。

一方、「支配人が入居者みんなのことを真剣に考えてくれて、その姿勢を私は尊敬しているんです」と野尻優子さん。その言葉に照れながら「デスクでじっとしてられない性分なので」と笑う後藤支配人だが、確かに、ガーデニングサークルの活動の際にも一緒に汗を流す様子は、まさに仲間そのものに映った。

4月には手塩にかけて育てたえんどう豆の収穫が始まり、5月にはトマトの種を蒔くという皆さん。ガーデニングサークルの“シーズン開幕”はもう間近だ。

Special interview



ガーデニングが好きな者同士。
菜園に誰かが姿を見せると
自然と仲間が集まります。



メンバーのほとんどが昔からガーデニングには覚えがあるというだけに、本格的な菜園づくりにしても難なく取り組んでいる。「それぞれにお詳しいですし、何より土に触れる機会を喜んでくださっていると感じます」。そう話すのは、いつも一緒に菜園の世話などを手がけている後藤支配人。加えて、銘銘が自宅で庭づくりをしていた時と比べてその充実感は格別といい、「土いじりが好きな仲間で菜園に集まるのは楽しい」と話す久保田和枝さんの言葉にも、誰からともなく「その通りよね」「色々な知恵を出し合うことができるし」「みんなでおしゃべりしながら作業していると楽しいし、はかどるしね」と全員が納得の表情だ。一番最近サークルに仲間入りしたという佐藤希典さんも「すでに入居していた知人の勧めで見学に来た時、季節感あふれる庭の素晴らしさに目を奪われました。その中でも菜園に植えられた作物のみずみずしい様子が印象的だった。それで入居後すぐに参加したんです」と振り返る。

みのタネの一つだが、「暇さえあれば家内と草取りに精を出します。コッコツやっているうちに楽しくなってきた」と話す藤田輝範さんご夫妻の活躍で、今では「雑草が生える暇もないほど」なのだとか。メンバーもその熱意には感謝するとともに二目置いている。

ガーデニングサークルが収穫した作物は、施設内のダイニングで振る舞われることもある。そのダイニングについて「おいしくて、メニューも豊富なんですよ」と教えてくれるのは西房子さん。「箸置きやお茶碗などの器にも工夫を凝らしてくださっていて、目の保養になります」と好評だ。「入居してみたら、同級生が5名もいて驚いた」と話す武田真砂さんも、そんな友人同士で過ごす食事のひとときはガーデニングサークルの活動と同様楽しめたい、「味が良かった時は、必ずシェフにひと声かけるように心がけています」。ご入居者からの心配りは、スタッフにとって大きな励みになっていることだろう。



季節感あふれる庭の中でも、
菜園が印象的で、
入居後すぐに参加したんです。



冒頭の写真は、そんな多忙な社会人となる前、西南学院大学の鉄道研究会時代に撮ったものだ。「就職してからは仕事一筋で、鉄道や写真からも離れていた」と言う福嶋社長が、再び趣味の鉄道や写真撮影に目覚めたのは、あと数年で60歳を迎える頃。「ふと振り返った時、あれ？自分の趣味は何だったっけ？」と思い、気になつていた各地の路面電車の路線を踏破したり、鉄道風景を撮影したり、一人であちこち出かけるようになりました」

旅はもっぱら一人旅という福嶋社長だが、SJRを率いる責任者としての、思いを尋ねると「チームワークが大事ですね。看護師、介護士、ケアマネジャーなど全員が働きやすい環境にして、居心地の良い施設をみんなでめざしていきたい」と話してくれた。また、常に事故と隣り合わせの業種で培われた「安全」へのシビアな考え方を生かし、スタッフの意識やスキルをさらに強化したいとも。「ゴールはありませんからね」と穏やかに語る福嶋社長。趣味に没頭できるのは、もう少し先になりそうだ。

Shall we go for a walk? —手仕事が見える旅 新社長インタビュー—

居心地の良さと安心感を どこまでも追求し続ける。

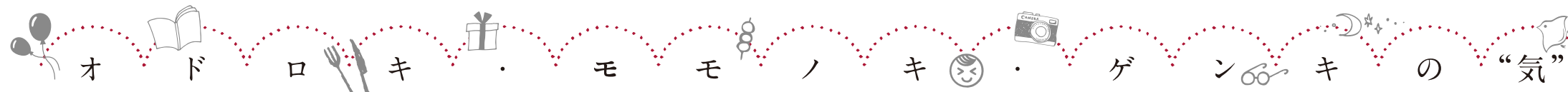


福嶋和彦
JR九州シニアライフサポート
株式会社
代表取締役社長

ふくしま・かずひこ ●1956年福岡県生まれ。1979年、日本国有鉄道入社。民営化時にJR九州に入社し、熊本駅長などを歴任。幼少期からの鉄道好きで、趣味は写真。2018年6月より現職。



「昨年の『SJ R六本松』の文化祭に出したものです」
そう言つて昨年6月に就任した福嶋新社長が見せてくれたのは、かつて福岡市内を走っていた路面電車の写真。幼少期から鉄道好きで、国鉄職員だった父親に続いてJR九州に入り、以来40年間、営業部担当部長から熊本支社長、レンタカー会社社長まで様々な現場を経験してきた。



News_Topics

SJRレポート

Today my new life begins. —スタッフのハートをひとつに SJR 六本松—



安土美真
株式会社グリーンハウス
所属
住宅型有料老人ホーム
SJR六本松 料理長
(介護支援専門員)

あづち・みま ●京料理店で
のアルバイトをきっかけに、
料理の自由さと魅力に取り
つかれ、大学卒業後料理の
道へ。『SJR別院』『SJR大
分』でも料理長を歴任。

一番の食卓を目指して、 日々新しい料理を追い求める。

「新しい街」としてさらに賑わいを見せる福岡市中央区六本松。その中心に位置する『SJ R六本松』は「安心快適」をベースに、より上質でこまやかなサービスを提供できるハイクラスな施設を目指しています。毎日の楽しみでもある食事は、栄養士が管理するバランスのとれた献立。料理人が一品一品丁寧に作りあげ、季節感ある彩り豊かな料理を提供しています。30人ほどのスタッフが所属し、ご入居者の皆さまに、楽しく健康第一の食事をと日々励んでいます。

料理長の仕事は、献立の確認から、工程の見直し、スタッフの管理や時間配分など多岐にわた

る。しかしながら、一番こだわっているのは、その料理の「美味しさ」であり、思いやりのある食

事。「味はもちろん、食べやすさでもあり、温かさでもあり、見た目でもあり、様々な要素が合わさつて一つの食事になる」。改めて料理の奥深さをそう教えてくれる安土さん。誇りとプライドを持った、SJ Rで働く、職人気質の高い料理人とスタッフ30人をまとめ上げる手腕を発揮する料理長だ。真面目で気さくな人柄だが、「常に美味しい、一番の食事を提供する場でありたい」と語る姿には、熱い思いを秘める強さが感じられた。

朝は各テーブルを回り、昼は介護が必要な方々と、夜はまた各テーブルを回って...と自分なりのルールを持つて意見を伺いに行っている。その内容はスタッフたちに伝達するやいなや、あつという間に料理人たちに広まり、次の食事に反映される。日々進化、改善。スタッフ全員が、ご入居者に美味しく食べてほしいとの想いで一致しているからこそであろう。

「料理一品」品はそれぞれの作品だけれど、食卓に並ぶまでは、配膳なども含めチームワークが重要。その中でも、スタッフそれぞ



れの良さを大事にしていきたい」と安土さんは言う。
「わたしは文句を言われた人なんです。だって、もつともつと料理が上手になりたい。もつと新しい料理を提供したい。進化したい。美味しい料理を提供したい。ただ、ベースにあるのはやっぱり母の味。食べ慣れた味なんです。それが大事なんですけどね」
まだまだ上を目指そうとする料理長の熱量が、これからも『SJ R六本松』の食事をますます進化させてくれそうだ。



あったか〜い囁^{はなし}④
「誕生日の電話」

作家 ◆ 下重 暁子

四十代から五十代にかけて、全国を講演で飛びまわっていた。

朝は雪の北海道にいたのに、夜には九州の博多で講演会を終えて中洲で飲んでいるなど、日常茶飯事であった。若かったのである。

目的は講演会の他に、その土地を出来る限り知って帰ることだった。列車や飛行機の時間が許すかぎり、自分のための旅をした。そこで出会った日本の美そして人、今も私のまわりにあつて心を慰めてくれる。

大分の別府温泉の杉乃井ホテルで講演会を終えたあと、一泊はそこで過ごすとして次の一日が空いていた。

どうしようかと考えていた時、私のファンだという電話の交換手さんが、「良かつたら山なみハイウェイを通つて熊本まで御案内しましょう」という。

手際よく親しい個人タクシーを手配してくれ、その人の案内で九重連山をながめ阿蘇の大草原を突っ切つて高原のホテルまで。初めて会った女性なのだ。知り

合つたきつかけは何だったか、今考えてもわからない。常に始まりはわからないのにいつの間にか仲良くなっている。そんな人達が全国に居る。熊本ではNHK熊本放送局勤務の同期アナ宮沢信雄さんが待つてくれた。次の日熊本空港から帰郷し、忘れられない旅になった。というのは、その女性が素朴ながら心をつくして同行してくれたおかげである。

日頃はなかなか会えないが、私の誕生日、五月二十九日になると必ず電話がくる。私が在宅していてもいなくても、必ず伝言がある。四十年以上欠かすことなく。その誠意に頭が下がる。彼女が結婚して滋賀県に住むようになってからは、私が関西に行く時は会いに来てくれる。

鹿児島にも妹のような存在の女性がいる。それも仕事で出会った社長の秘書だった。彼女からも必ず誕生日に電話がくる。

初対面でそういう人を嗅ぎわかる才能が私にはある様だ。今ではその人達に会うのが旅の目的になっている。

しもじゅう・あきこ●1959年、早稲田大学教育学部国語国文学科卒業。同年NHKに入局。アナウンサーとして活躍後、フリーとなり民放キャスターを経た後、文筆活動に入る。ジャンルはエッセイ、評論、ノンフィクションと多方面にわたる。公益財団法人JKA（旧：日本自転車振興会）会長等を歴任。現在、日本ペンクラブ副会長、日本旅行作家協会会長。『極上の孤独』『家族という病』などがベストセラーに。その他著書多数。

表紙／大分県由布市にある由布岳。人気の温泉観光地・由布院駅に降り立つと、真っ先に目に飛び込んでくるこの壮大な由布岳は、標高1583m、湯布院の北東部に位置し「豊後富士」と呼ばれる美しいシルエットの活火山です。古くから神の山と崇められ『豊後風土記』や『万葉集』にも登場する霊峰で、山頂からは別府湾や九重連峰を望める人気の山です。

『眺めのいい部屋』 No.04
2019年3月1日発行

発行・編集 JR九州シニアライフサポート株式会社
発行人 福岡和彦
編集・校正協力 株式会社オフィスノベタ(表2、表4)
デザイン 荒嶽耕平
校 正 氏家可奈子

写真、イラストデータ協力(敬称略)

表紙 写真／大分県由布市「由布岳」
3-7 写真／株式会社ジーエー・タップ
3-5 文／松田理絵
6-7 文／氏家可奈子、八田彩
表4 イラスト／田中靖夫

 JR九州シニアライフサポート株式会社

〒813-0041 福岡市東区水谷2-50-1
TEL.092-410-1255 FAX.092-674-3782

SJR

検索